



# インドネシアが50年で 変わったこと、変わらないこと、 そして今後の予想



インドネシア進出サポート  
小野耕司





# 自己紹介



- 1975/4～1981/6 ヤマハ(株)入社 インドネシア工場立上支援分野配属
- 1981/6～1987/3 インドネシア工場生産課長 電子鍵盤楽器の組立生産
- 1987/3～1995/7 インドネシア工場長 電子楽器、ピアノ、ギターの輸出拠点化
- 1995/7～2005/3 帰国、インドネシアを普及品の生産拠点化するプロジェクト
- 2005/3～現在 ヤマハ退職、インドネシア進出サポートコンサルタントとして独立  
インドネシア語翻訳・通訳

静岡大学客員教授、専修大学客員講師

独立行政法人日本貿易振興機構(JETRO)専門家


独立行政法人 中小企業基盤整備機構アドバイザー

一般社団法人海外事業支援センター(OBAC)アドバイザー

一般財団法人海外産業人材育成協会(AOTS)講師

一般社団法人日本インドネシアビジネス協会(ABJI)理事

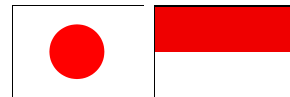
などを経歴し、これまでのインドネシア進出支援企業数は約100社



インドネシアとの  
関わりも50  
年になりました  
た



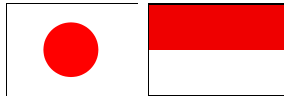
# セミナー要旨



- 1975年に楽器メーカーに入社して、インドネシア担当となってから、50年近くになります。
- 入社後のインドネシア新工場の立上支援、15年間にわたる現地工場駐在、出張ベースでの新会社設立支援、そしてインドネシア進出支援コンサルタントとして独立してからの20年と、社会人になって以降は半世紀にわたってインドネシアと付き合い合ってきました。
- この間、インドネシアには大きく変わったことがあり、そしてほとんど変わっていないことがあります。
- そして、これからインドネシアはどのように変わって行くのでしょうか？
- このセミナーでは20の分野について、あくまでも個人的な経験と観点に基づき、インドネシアの今後を定性的に予想してみたいと思います。



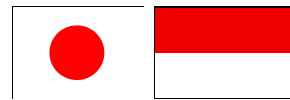
# 目次



分野	観点
1. 国内政治	: ノン・プリブミの台頭、公僕としての意識、利権の温床、大きな政府、縁故主義
2. 外交軍事	: 非同盟主義、対共産主義、グローバルサウス
3. 治安警備	: イスラム過激派テロ、民族独立反政府テロ、麻薬犯罪、集団暴力
4. 地理自然	: 火山活動、地震対策、雨期乾期の区別
5. 経済状況	: 貧富の格差、ルピアの価値、ジャカルター極集中、国内消費の役割
6. 社会基盤	: 公共インフラ整備、エネルギー供給
7. 環境保護	: 大気汚染、河川汚染、地盤沈下、ゴミ処理、脱炭素
8. 産業構造	: 資源輸出規制、裾野産業育成、自給力の低下
9. 技術開発	: 先進国依存の技術力、恵まれ過ぎる天然資源
10. 投資環境	: 優先される大規模投資、投資先の地方格差
11. 労働事情	: 人口ボーナス、労働者保護から投資促進、高学歴化
12. 宗教信仰	: 政教分離の実態、イスラム戒律の広がり
13. 食事文化	: 豊富な食材、日本食の人気、屋台文化
14. 住宅事情	: 重厚長大志向、一軒家からアパート
15. 健康衛生	: 糖尿病、ダイエット志向、ミネラルウォーターの浸透
16. 教育人材	: 学習環境、新卒の学力、経営の現地化
17. 娯楽文化	: インドネシア映画、文芸作品、プロ・スポーツ界
18. 道徳倫理	: 拡大する汚職、縁故主義、世襲政治
19. 国民意識	: 愛国心と誇り、話し合いによる総意形成、相互扶助
20. 対日感情	: 技術と経済の先進国、憧れるが住みたい訳ではない、衰退する日本
まとめ	



# 1. 国内政治



ノン・プリブミの台頭、公僕としての意識、利権の温床、大きな政府、縁故主義  
(プリブミとは、土着民の意味で、マレー系民族を指す)

## ■ 変わったこと

- 1965年9月30日のインドネシア共産党クーデター事件以来、スハルト政権下では30年にわたり、**華人系インドネシア人が政界で活躍**することは出来なかったが、アホック氏のようにジャカルタ州知事を務めるケースも出て来た。
- 第6代大統領のユドヨノ氏までは、**縁故主義で政権を世襲**にすることは無かったが、第7代大統領のジョコウィ氏は露骨に推し進めている。
- スハルト政権では、政治家や官僚は上から指示する立場が多かったが、ユドヨノ政権以降は、**民間に対してサービスを提供**する姿勢に変わって来ている。

## ■ 変わらないこと

- 40近い中央省庁から成る**大きな政府**は多くの大臣、副大臣、総局長などを生み出し、それが利権の温床になっている。
- 少なくなったとは言え、今でも**10を超える政党**が勢力を凌ぎ合っている。

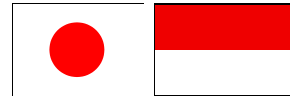
## ■ 今後の予想

- 2004年以降の、国民の直接選挙による大統領選出制度が、次第に権力者側に有利になるように、巧みに回せる仕組みが出来上がり、何処の国にも見られるように、資金力を持つ華人と結び付いた、**世襲政治家達が政治を操る国**になる。





## 2. 外交軍事



非同盟主義、対共産主義、グローバルサウス

### ■ 変わったこと

- 1945年の独立においては、非同盟主義を外交の基盤に置いたが、スハルト政権崩壊以降は、ASEANの他に、APEC、RCEP、G20に参加し、現在はOECDへの加盟も予定されている。
- 1965年9月30日のインドネシア共産党クーデター事件以来、スハルト政権下では共産主義は厳しく取り締まられたが、スハルト政権崩壊以降、特に中国との国交回復の後は、共産主義に対する締め付けは年々緩くなっている。
- 独立直後は、隣国とマレーシアとの領土問題が紛争の種であったが、最近では中国との領海問題が主な紛争の種になっている。

### ■ 変わらないこと

- 世界最大のイスラム教徒を抱える国として、アラブ諸国との緊密な連携は益々強くなっている。

### ■ 今後の予想

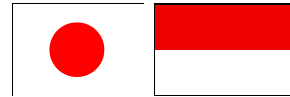
- 東西冷戦からアメリカ一極支配を背景にしたG7体制、そしてBRICsを中心としたグローバルサウスの台頭に移り変わる中で、インドネシアは国際社会での発言力を確実に高める。

The 'Global South'  
As defined by the Organization for Women in Science for the Developing World, a unit of UNESCO





### 3. 治安警備



イスラム過激派テロ、民族独立反政府テロ、麻薬犯罪、集団暴力

#### ■ 変わったこと

- アラブ諸国でのイスラム過激派テロ組織の活動低迷に合せ、インドネシア国内でのテロ活動も終息に向かっている。
- 国内で最大の反政府独立運動であったアチェ独立運動は、2005年のスマトラ沖地震の後に、復興を優先するため解散した。

#### ■ 変わらないこと

- 資源の恩恵を要求している自由パプア運動は、現在も政府軍や警察との闘争を続けている。
- 麻薬売買は社会に深く蔓延っており、犯罪の温床となっている。
- 学校単位、町内会単位での集団暴力闘争は今でも全国各地で頻発している。

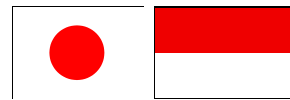
#### ■ 今後の予想

- 衣食足りて礼節を知ると言われるように、国民一人当たりの所得が増え、失業率と貧富の差が改善されない間は、上は反政府運動から下は集団暴力まで、社会問題として残る。





# 4. 地理自然



## 火山活動、地震対策、雨期乾期の区別

### ■ 変わったこと

- 以前の様に**雨期と乾期の天候**の違いが明確でなくなり、入れ替わりの時期も年により大きく異なる。

### ■ 変わらないこと

- 火山活動や地殻変動による地震は頻発しているが、**耐震構造**を法律で規定する動きはほとんどないため、学界においては本格的に研究する体制は無く、建設業界においても、敢えてコスト高になる仕様を取り入れる動きは無い。

### ■ 今後の予想

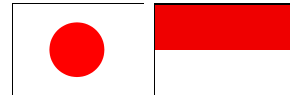
- 日本人は古来より、自然災害に対する備えを、安全保障の最優先課題として取り組んで来たが、インドネシア人は宗教や気候の違いから、**自然災害の危険を予知**して備えることには、これからもさほど関心を払わない。







# 5. 経済状況



貧富の格差、ルピアの価値、ジャカルター極集中、国内消費の役割

## ■ 変わったこと

- 50年前はRp.415/360円/USDであった**為替レート**は、スハルト政権下での3回のルピア切り下げと、アジア金融危機が主な原因で、現在はRp.16,000/160円/USDまで変動した。
- ルピア切り下げの背景には、石油の輸出に依存した経済構造があり、逆石油ショックにおいて、インドネシアの経済は危機的状況に晒されたが、その後は国内消費が経済成長を牽引するようになり、**石油輸出に依存しない**、安定し経済を維持している。

## ■ 変わらないこと

- 国全体は経済成長を続けているが、大きな**貧富の格差**は解消されていない。
- 首都ジャカルター極集中の経済構造も、大都市と僻地の**経済格差**の原因となっている。

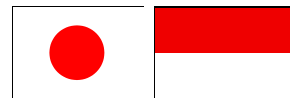
## ■ 今後の予想

- GDPは毎年5%強の成長を続け、世界の主要な経済大国の仲間入りを果たし、1人当たりGDPも着実に増えるが、その成長から取り残された数パーセント(1千万人~2千万人)の**貧困層の存在**が忘れ去られてしまう。





# 6. 社会基盤



公共インフラ整備、エネルギー供給

## ■ 変わったこと

- 絶対的に不足していた固定電話回線から、**携帯電話**にパラダイムシフトしたお陰で、コミュニケーションの効率が劇的に改善された。
- **ジャワ島縦断高速道路**の開通は、インドネシア経済を一段レベルアップさせる、大きな効果をもたらしている。
- 大ジャカルタ圏内(JABODETABEK)の**首都高速道路網**の急速な整備は、交通渋滞の致命的な状態をかわしている。
- 地方都市の空港が増強され、他島間を結ぶ**国内航空便**が増大している。

## ■ 変わらないこと

- 経済成長の基盤となる電力供給は、石炭火力発電を主体に賄っているが、**需給バランス**にはほとんど余裕が無いままで推移している。
- ジャカルターバンドン間の高速鉄道は開通したが、他の**従来路線**は時代遅れのままである。
- **水道水**は汚染されており、かつ硬水であるため、飲用には適さない。

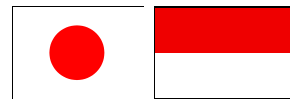
## ■ 今後の予想

- ジャワ島を皮切りに、**高速鉄道網**の整備を最優先に進めるが、経済成長に資する品質のものよりも、安かろう悪かろうの中国製を選択する。
- 世界的な脱炭素の圧力に対するポーズとして原子力発電の検討を進めるが、実質的には**石炭火力発電**を増強する。





# 7. 環境保護



大気汚染、河川汚染、地盤沈下、ゴミ処理、脱炭素

## ■ 変わったこと

- 地下水の汲み上げで**地盤沈下**が激しいジャカルタ北部からは、自動車工場が転出し、富裕層の住宅はジャカルタ南部に移動したため、コタと呼ばれるジャカルタの旧商業地区は衰退の一途を辿っている。

## ■ 変わらないこと

- 都市部の排気ガスによる大気汚染、河川へのゴミの不法投棄、そして増える一方の家庭ゴミの堆積への、抜本的な対策はほとんど取られて来ていないため、**環境は悪化する一方**である。
- 世界的な脱炭素の圧力に対するポーズは取っているが、エネルギー源の殆どは石炭を主とする化石燃料によるもので、いわゆる**再生可能エネルギー**は実質的にゼロに近い。

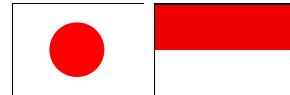
## ■ 今後の予想

- 豊富な石炭、天然ガス、そして石油資源の恩恵を活かした火力発電、そして排気ガス規制の無い自動車から排出されるCO2は、広い領海と森林が十分に吸収してくれることが正論となり、**脱炭素の動きは消滅**する。





## 8. 産業構造



資源輸出規制、裾野産業育成、自給力の低下

### ■ 変わったこと

- スハルト政権の間は、欧米の大資本と結びついた、既得権者による資源の輸出が優先され、国内での工業材料への転換が疎かにされて来たが、ジョコウィ政権以降は、**資源輸出を規制**し、国内でサプライチェーンを完結させる方向に舵を切っている。
- 人口が増加し続けているのに反し、農業人口が減少傾向にあるため、特に**米の供給不足**の頻度が高まっている。

### ■ 変わらないこと

- 産業の発展には、ピラミッドの裾野を構成する、中小零細企業の存在が必須であるが、インドネシア政府は未だに**大規模投資の誘致を優先**し、中小零細企業の発展に寄与する投資に対しては冷淡である。

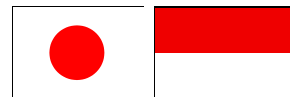
### ■ 今後の予想

- 大企業の指導を受けて来た、**中小の地場産業**は確実に、量と質の両面で成長して行くであろうが、今のインドネシア政府の方針では時間がかかり、タイ、ベトナム、そしてインドの後塵を拝すことになる。





# 9. 技術開発



先進国依存の技術力、模造技術、恵まれ過ぎる天然資源

## ■ 変わったこと

- 日本の高度経済成長時代と同様に、産業の発展に必要な技術者を早急に育成しなくてはならない、とのコンセンサスは社会の中で構築され、**工学系の専門学校**は急増している。

## ■ 変わらないこと

- 高級ブランド品を、個人事業レベルで精巧に**模造して儲けるビジネス**は、一つの産業分野と言えるほどに社会に根付いている。

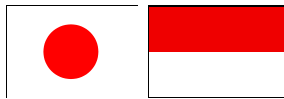
## ■ 今後の予想

- 天は二物を与えずと言われるように、余りに恵まれた天然資源を与えられたことで、無から有を生み出すような、技術開発での必死の努力は元から不要で、**南国の楽園**はこれからも変わらない。





# 10.投資環境



優先される大規模投資、投資先の地方格差

## ■ 変わったこと

- 外国企業を規制する、悪名高い『ネガティブリスト』の中の、主な産業で外資規制の対象となるのは、2020年の**雇用創出法**で殆どが抹消された。

## ■ 変わらないこと

- インドネシア政府が誘致を優先する投資分野は、天然資源を工業材料に転換するための**大規模産業**であり、産業のピラミッド構造を支える裾野産業の、中小零細企業育成のための投資にはほとんど関心が無い。

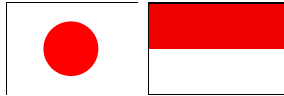
## ■ 今後の予想

- 豊富な天然資源を自国内で工業材料に転換出来て、さらに、裾野産業が強化されると、資源輸出国から**本当の工業国**に変身出来ることに、政官財が気付いた時点で大きく変わる。





# 11.労働事情



人口ボーナス、労働者保護から投資促進、高学歴化

## ■ 変わったこと

- 2020年の雇用促進法により、労働者の過剰保護から、投資促進による**雇用機会創出優先**に舵を切り、最低賃金改定の上限設定や退職金の減額が行われた。
- 年々、高等学校および大学進学率が高まり、現場作業者の主体は、**中卒から高卒**が普通になっている。

## ■ 変わらないこと

- 人口は未だに増え続けており、15歳から60歳までの**労働人口比率**も、60%強を維持している。

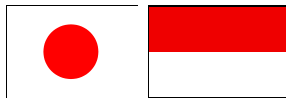
## ■ 今後の予想

- 国内市場での需要増が供給を押し上げ、雇用機会創出に繋がり、失業率を5%以内に抑えながらの、**上昇スパイラル**は続くと期待される。





# 12. 宗教信仰



政教分離の実態、イスラム戒律の広がり

## ■ 変わったこと

- イスラム教の戒律である**ハラル志向**が強まり、2000年以降は公共の場でのアルコール飲料の販売自粛が始まり、2024年以降はハラル認証の強制力が高まる。

## ■ 変わらないこと

- 世界最大のイスラム人口を抱える国ではあるが、信仰は義務としても、**選択の自由**は憲法で保証されており、祝日もイスラム教の他に、キリスト教、ヒンズー教、仏教に割り当てられている。

## ■ 今後の予想

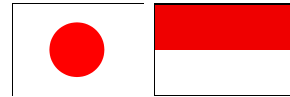
- キリスト教が支配する欧米の勢力が衰退し、イスラム教が主流のグローバルサウスが台頭して来るに従い、インドネシア国内のイスラム教組織の発言力も高まり、政教分離は維持しつつも、生活習慣の中に**イスラム教の戒律**が益々色濃く反映される。







# 13. 食事文化



豊富な食材、日本食の人気、屋台文化

## ■ 変わったこと

- 2000年以前は、日本人と限られた範囲のインドネシア人向けであった日本食レストランが、ショッピングモールの急発展と共に、主にファミリーレストランとして、ラーメン店や回転すし店などが、一般のインドネシア人の間に浸透している。

## ■ 変わらないこと

- 都市部に限らず、田舎においても、道端で安く空腹を満たせる多くの種類の屋台は、依然としてインドネシア人の食文化を支えている。

## ■ 今後の予想

- 人口増加による国内需要の増大に対して、米を始めとする穀物、野菜、果物、家畜、そして魚介類の供給は今後も十分に対応出来るが、自給率を維持するために、輸出の比率は低減する。





# 14.住宅事情



重厚長大志向、一軒家からアパート

## ■ 変わったこと

- 特に都市部においては、高級住宅を購入する場合、あるいは賃貸をする際でも、一戸建てより**高層マンション**を選ぶ割合が増えている。
- 戸建の高級住宅街は、アメリカ風に高い塀で囲まれて治安を維持する、**Gated Community**が広まりつつある。

## ■ 変わらないこと

- 特に戸建の場合は、価格帯に関係なく、**重厚長大**になる建材と工法が好まれる。

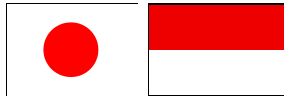
## ■ 今後の予想

- 日本と同様に、急増する中間層が求めるものは、家電製品から自家用車、そして**マイホーム**へと進み、中級レベルの戸建ならびに高層マンションの需要は、今後大きく伸びる。





# 15.健康衛生



糖尿病、ダイエット志向、ミネラルウォーターの浸透

## ■ 変わったこと

- 生水を煮沸殺菌して飲料水にすることが少なくなり、代わりに多くのブランドの、**ボトル飲料水**が市販されている。
- ダイエット目的の、コレステロールを抑えるための、様々なブランドの**サプリや飲料**が宣伝されている。

## ■ 変わらないこと

- 甘い飲み物を好む傾向は堅持されており、**糖尿病**が国民の病気と言われなくなるのは難しい。

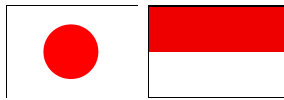
## ■ 今後の予想

- コロナ被害を通じて、日常生活における衛生管理の重要性は、身に染みただずであるが、終息した後は何事も無かったように、今後も**衛生観念**が大きく変わることはない。





# 16.教育人材



学習環境、新卒の学力、経営の現地化

## ■ 変わったこと

- 日本企業がインドネシアに進出して半世紀を超えたが、トヨタ自動車など、**経営トップ**を日本人からインドネシア人にシフトする事例が出始めている。

## ■ 変わらないこと

- 小中学校の**義務教育現場**の予算が絶対的に不足しており、朽ちた校舎と生活苦を抱えた教員の絶対数も少ない中で、基礎学力が身に付くのは難しく、高卒採用の新入社員は特に数学が苦手である。

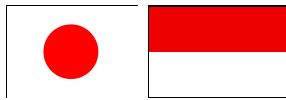
## ■ 今後の予想

- 昼食の無償化と言う話題性のある施策は検討されているが、インドネシア政府が近い将来に、教育現場の本質的な予算を大幅に増やすことは期待出来ず、社員の能力を高めるためには、基礎学力も**社内で再教育**する必要がある。





# 17. 娯楽文化



インドネシア映画、文芸作品、プロ・スポーツ界

## ■ 変わったこと

- **プロサッカーチーム**の実力が向上し、2024年のパリオリンピックに、あと少しで出場出来るところまで来た。

## ■ 変わらないこと

- インドネシア製の映画は相変わらず、**コメディ**と**ラブロマンス**ものが主流で、Netflixなどの配信サービスにおいても、前面に出て来る作品はほとんど無い。

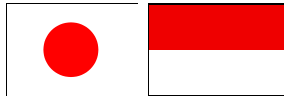
## ■ 今後の予想

- 映画も含めた文芸作品を考えた場合、インドネシア語の表現力の脆弱性は致命的であると推測されるが、絵画、映像、音楽などの**感性の分野**では独特な能力を発揮することが期待される。





# 18.道徳倫理



拡大する汚職、縁故主義、世襲政治

## ■ 変わったこと

- 2000年以降に独立機関として設立された**汚職撲滅委員会**(KPK)は、政府や国家警察などから様々な圧力を受けながらも、国民の支持を得て、政府高官の汚職を摘発するなど、その使命を全うしている。

## ■ 変わらないこと

- スハルト政権下で、国軍(警察軍含む)の幹部が民間組織の顧問などを兼務したことは、不正の温床として政権崩壊後は禁止されていたが、最近になり、それを回復させる動きが見られる、**武士は食わねど高楊枝**の精神が馴染まないことを証明している。

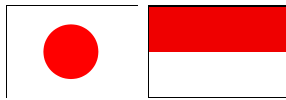
## ■ 今後の予想

- 建国五原則であるパンチャシラ、すなわち①唯一神への信仰、②公正で文化的な人道主義、③インドネシアの統一、④合議制と代議制における英知に導かれた民主主義、⑤全インドネシア国民に対する**社会的公正**の中の、⑤の実現は遠い未来になりそうである。





# 19.国民意識



愛国心と誇り、話し合いによる総意形成、相互扶助

## ■ 変わったこと

- 軍事独裁のスハルト政権が崩壊し、**欧米式議会制民主主義**が動き出した2000年以降は、ジャワの文化風習であった、話し合いによる総意形成 (Musyawarah Mufakat) や、相互扶助 (Gotong royong) という言葉を耳にする機会が少なくなった。

## ■ 変わらないこと

- 政府主導とは言え、毎年8月17日の**独立記念日**に、国を挙げて全国民が建国を祝い、独立の誇りを称え合う姿は、これからも変わらないと期待される。

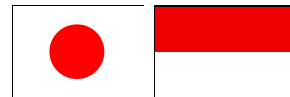
## ■ 今後の予想

- インドネシア共和国として一つの国民になってからまだ僅かに80年しか経っておらず、それ以前の300年にわたるオランダによる植民地支配の時代、そしてそれ以前には2000年にわたる群雄王国の時代があり、確固たるインドネシア共和国の国民意識が形成されるまでには、**更に長い年月**が必要と思われる。





# 20.対日感情



技術と経済の先進国、憧れるが住みたい訳ではない、衰退する日本

## ■ 変わったこと

- 技術と経済の先進国で憧れの対象で、頼りになり見習うべき国から、2000年以降は、**衰退する国**で頼りにはならない国に見られている。

## ■ 変わらないこと

- 政治、経済、外交では中国依存が進んでいるが、**道徳倫理**の面では今でも日本人に一目置いており、日本人自身は忘れてしまったが、日本がアジア諸国を白人支配から解放した事実は正しく理解している。

## ■ 今後の予想

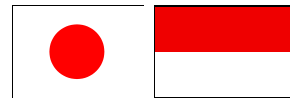
- 経済、産業、技術の分野では、中国、韓国、台湾、インドとの関係を強めると思われるが、彼の国々には無い、2600年を超える日本独特の文化に対しては、違った面での憧憬と尊敬の念を持って、同じ**島嶼国家の民族**として特別な親交を維持すると期待される。



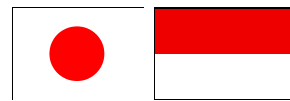




# まとめ



- 日本が明治維新の後に急速に推し進めた富国強兵と、昭和時代の高度経済成長の150年の現代史を、インドネシア共和国は1945年の独立以来、約半分の年月を経て、似た様な道を辿って来た。
- しかし、インドネシアには豊富な天然資源はあるが技術力は低く、日本には高い技術力はあるが天然資源は乏しい。
- 国家の独立と主権を維持するためには、経済成長、食料自給、資源自給、そして軍事力が前提条件となるが、日本は経済力を除いて他の条件を放棄したのに対して、インドネシアは全ての条件を維持している。
- 経済成長の要因としては、資本、技術、労働力、資源、市場が挙げられるが、インドネシアは今後も資本と技術を自国内で満たすのは難しいため、他国に依存することになり、この分野での舵取りを間違えないことが発展の鍵となる。
- そして、道徳、倫理の面で、美德が称えられる国を目指すことで、名実ともに世界の大国の一つと言える。



## インドネシア進出サポート公式サイト

インドネシア進出準備から撤退までの要点を簡潔にまとめたサイトです  
(Googleトップランキング)

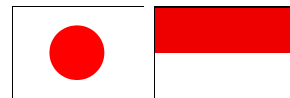
## インドネシア最新情報ブログ

あらゆる分野での情報を毎日、どんなメディアよりも早く紹介しています

## インドネシア進出サポートウェブセミナー

公式サイトに掲載されたセミナースライドサンプルの中から、ダウンロード件数の多いもの順に音声解説付きのスライドをアップロードしています

**愛する二つの祖国である、日本とインドネシアの発展のため、  
全てのコンテンツは無料で公開されています**



ご清聴ありがとうございました  
ここからは質疑応答です